

Title	「Avignon 國際學會」報告
Author(s)	畠中, 敏郎
Citation	大阪外国語大学学報. 5 p.23-p.36
Issue Date	1957-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80124
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「Avignon 國際學會」報告

畠 中 敏 郎

LE CONGRÈS INTERNATIONAL D'AVIGNON

par HATAKÉNAKA-Toshio

Exposé du 1^{er} Congrès International de Langue et Littérature du Midi de la France, qui a eu lieu à Avignon en France du 7 au 11 septembre 1955, et auquel j'ai participé.

AVANT-PROPOS. Des affaires familiales m'ont empêché de faire un rapport sur ce Congrès, à Tokio, au mois de juin, au cours de la séance du printemps de la Société de Langue Française du Japon. J'ai pu remplir mon devoir 5 mois plus tard dans la séance plénière d'automne de la même société, ouverte à Tenri, Japon, le 16 novembre 1956. J'ai fait le présent compte rendu en me basant sur cette conférence.

I JUSQU'À L'OUVERTURE. Depuis l'arrivée au Japon du premier circulaire du Congrès jusqu'à celle des deux Japonais à Avignon. Explications et commentaires des circulaires.

II PROGRAMME DU CONGRÈS. Description des choses faites au cours des cinq jours.

III COMMUNICATIONS ET DISCUSSIONS. Observations de la marche des séances de travail. Présentation sommaire de quelques communications.

CONCLUSION. Aucune décision n'a été faite, aucun manifeste n'a été publié. Je n'ai senti aucune atmosphère politique dans le Congrès, sauf la distribution de pamphlets par M. Louis Estève, originaire de Catalogne et habitant d'Avignon, pour protester contre l'oppression par le Gouvernement espagnol du mouvement littéraire et social au moyen de la langue catalane.

C'est pour la première fois que se sont rassemblés les spécialistes de langue et littérature du Midi de la France et rien que cela, le Congrès a eu une pleine raison d'être. Prosper Mérimée décrit qu'il a cru être en Espagne quand il est arrivé pour la première fois à Avignon en 1834. Mais la Provence et le Comtat d'aujourd'hui sont tout à fait imprégnés de français et de littérature française. Leurs habitants en général ont eu un grand orgueil et une assez grande surprise sur le fait que tant de savants sont venus, non seulement de toutes les régions de la France mais de tout le monde, étudier la langue de leurs ancêtres et ses produits. Et ils ont reconnu une fois de plus que ceux-ci ont une telle valeur même maintenant.

Ce fait ne contribuera-t-il pas au développement futur des mouvements de langue et littérature provençales et à la compréhension locale de ces mouvements?

Comme je dirai plus bas (dans le rapport en japonais), on avait exclu des travaux les communications sur la graphie de la langue moderne et l'instruction. Cette précaution avait été bien prise pour faire marcher les séances paisiblement et amicalement et pour traiter d'autres questions sans empêchement. Mais il me semble que le résultat en a donné un peu d'insuffisance au Congrès.

L'autre mécontentement pour moi était de ne pas avoir trouvé de communication concernant la littérature contemporaine en langue d'oc, bien que la faute n'en fût point aux organisateurs.

La prochaine séance est prévue en automne 1958. Il est désireux que des spécialistes bien qualifiés de notre pays y participent et qu'ils y fassent des communications éminentes.

Je termine ce bref sommaire en remerciant spécialement M^{me} Boutière ainsi que M. Boutière de la Sorbonne et aussi M. Rostaing de la Faculté des Lettres d'Aix, qui ont été très sympathiques depuis avant le Congrès et dont je garde un souvenir inoubliable.

le 1^{er} décembre 1956

前 置
一 開 會 ま で
二 學 會 次 第
三 研究發表と討論
あ と が き

前 置

昭和三十年九月七日から同月十一日まで南 France の Avignon 市で, Premier Congrès International de Langue et Littérature du Midi de la France——南部 France の言語と文藝とに關する第一回國際學會——が催された。ちやうど文部省在外研究員として渡拂することとなつた私は、これに間に合ふやうにわが國を出て、八月末 Paris の Orly 空港に着き、一週間後には Avignon に赴いて出席した。

この學會についての報告講演を、三十一年六月に早稻田大學で開かれた日本 France 語學會總會の席上で行ふことを望まれてゐたが、私の身邊の事情のため間際になつて出席を取りけした。やうやく、この秋十一月十六日、天理大學を會場とした同じ學會の臨時總會でそれを果すことを

得た。以下は、その報告講演をもととしたものである。

昭和三十一年十二月

一 開 會 ま て

この學會についての最初の案内は昭和三十年一月二十九日づけで出たが、私の受けとつたのは三月に入つてからのこと。それに依ると、主催者は France 各大学の南佛語・文藝擔當の教授たちで、後援は文部大臣と Avignon 市となつてゐる。Provence 語をもつて文藝その他の運動を行ふ郷土主義團體 Félibrige が結成せられたのが千八百五十四年のことであるので、南 France 各地では、前年すなはち昭和二十九年（千九百五十四年）以來その百年記念の行事をいろいろ實施してゐたのであるが、その一つとしてこの學會も生まれることになつたわけ。この百年記念行事についての Avignon 側の委員長は、元首相であり、今も代議士で同市長である Edouard Daladier であつたので、彼はこの學會にも終始盡力した。

學會そのものの présidents honoraires としては、Clovis Brunel, Albert Dauzat（學會後逝去）、Ernest Hoepffner の三碩學を戴き、président effectif には、France における romance 語學の最長老であり、membre de l'Institut、directeur de Romania であり、高齢ながら非常な元気で現役としての活動をしてゐる Mario Roques を据ゑ、その下に Montpellier 大學文學部長の J. Bourciez, Paris 大學教授で directeur de l'Institut d'Etudes provençales の J. Boutière, 同じく Paris 大學教授で directeur de l'Institut de Phonétique である P. Fouché が補佐として顔をつらね、委員としては南 France 各地の大學や高等學校などの教職にある人々がならんでゐる。事務の元締には、Aix-Marseille 大學の教授 Ch. Rostaing があたつた。

communication（研究發表）の時間は十五分を越えないこと、各發表につづいて討論が行はれること、その發表の正確な題目を三月二十五日までに必ず事務局へ知らせることが注意してあり、また、南 France 近代語の綴りの仕方に關するもの、同じ事柄の教育に關するものは發表の内容として受けつけないとして明記してある。綴りの方は以前からの論争の種になつてゐたものであり、今一つは實際教育を學術の會議に持ちこむと厄介なことになると考へて、ともに紛議を避けるために敬遠したものと見える。

會費は、はじめの四日間は一切の費用（遠足、見學、一回の會食費等を含む）で三千フラン、あとは参加自由であるが、閉會後の大宴會費（後に千五百フランときまつた）、最後の日の Arles, Camargue 地方への遠足代（千八百フランとなつた）は別勘定。なほ、家族同伴者は、家族一人につき千五百フラン。これらの費用は原則として前拂ひであるが、外國から送金の手續のめんだ

うな場合は、会場到着後に拂つてよい。

第二回の案内書（四月二十五日づけ）には、既に参加を申しこんだ人の名が國別にしるされ、発表を希望した人の演題が出てゐる。附けくはへて、この學會の詳細な報告書は、秋の末ごろには印刷に附せられる 予定とある。しかし、私が翌年三月のはじめに、當時の事務局長であつた Rostaing 教授の宅で見たときには、原稿はまだ書齋に積んであり、未着のものもあるといふことであつたし、現在まで出版になつたといふことを聞かないので、よほど予定より遅れてゐるものと思はれる。

第三の案内書は七月一日の日附であつたが、南佛語の綴りについての研究及びそれについての討論は受けつかなかつたこと、provençal とか occitan とかの呼名を用ひず、他の適當な名を南佛語について使用すべきこと、後に出版せられるはずの報告書には、langue d'Oc とか d'Oc とかいふ、あたりさはりのないひ方を記載することが附記せられてゐる。

學會事務局の證明があれば、出席のための France 國內鐵道運賃は往復で二割引になるのだが、さうしなくても、普通の遊覽切符で、國內往復千五百キロメートル以上で二割引、二千キロメートル以上なら三割引となるし、近隣諸外國からでもこの切符は買へるから、遠距離からの参加者は、多くこの方法を採用することとなる。

宿泊のことについては、最初の案内にも簡単に注意がしてあつたが、ここにまた、學會は一切宿の世話をせず、参加者各自で豫約をすべきことと明記し、Avignon 及び周邊各地のホテル案内が添へてあつた。自家用車などを利用する向が少くないこと故、かなりの遠方に宿をとつても、さしたる不便はないわけである。

さて、ここで Avignon といふ土地について一言しておくのも無駄ではないと思はれる。市は現在人口六萬あまりで、Nîmes（八萬あまり）について、この附近では第二の都會。France 第一の商港であり、Paris につぐ大都會である 地中海岸の Marseille まで P.-L.-M. 線（わが東海道線といふところ）で特別急行一時間十三分の所に位し、現在は département de Vaucluse の縣廳所在地である。昔はいはゆる Comtat venaissin の首都として、一時にせよ Roma と張りあつた catholicisme の中心地。Rhône 河に臨んで、その昔の教皇の宮殿や、Sur le pont d'Avignon... の歌に名高い Saint-Bénézet 橋を持ち、舊市街をとりまく城壁や城門を近代の再建ながら完全に残してゐる。かうした中世の餘光に加へて、南 France でのほぼ中心にあたつてゐるし、宿泊設備も相當整つてゐるので、大學などはない町ではあるが——否、特定の大學がないだけに、南 France の各大學の人が集まつて協力するには、却つて好都合であつたかも知れない——France でも初のこの學會の開催地としては、まさに當を得たものといへよう。それに

何よりも、Félibrige 運動の發足の地であり、その發展の中心となつた場所といふのが、この Avignon-Arles-Saint-Rémy 地方であつたのだから、この學會に最も因縁が深いわけである。

われわれ、といふのは、既に二年間 Paris に France 政府給費生として留學してをられる京都大學助手の大橋保夫氏と私とのことであるが、われわれは九月六日午後 Avignon に到着、かねて大橋氏が手配してくれてあつたホテルに荷物を置いてから、會場へ行つた。驛前には congressistes (學會出席者) 歡迎の banderole が掛かつてをり、そこから教皇の宮殿に至る Rue de la République を進めば、市役所や縣廳にも黃と赤との舊 Provence の紋章を染めぬいた旗がたくさん出てゐる。Place de l'Horloge といふ廣場の入口には、一方に「彼等は生き、われらの言葉を守つて來た」といふ有名な Mistral の詩句、他方に參加國の名を列記した板が一つづつ立つてゐる。二十二個國であるが、中に Japon も一役をになふ。

會場である Palais du Roure の中庭に受附があつて、そこで會費を拂ひ、programme や會員名簿を受けとる。參加章は、まるい厚紙に紐をつけたもので、荷札の如く、中に Avignon の市紋である三つの鍵が茶色地に白く浮きでてゐる。

名簿によると、男女總員百八十人。地元の France は最も多くて六十六人、ついではイギリスの二十三人、ドイツの十八人といふ順で、日本は三人。土地の新聞が報じた二百三十六名といふのは同伴家族を含んだものと知られる。ヨーロッパでは大部分の國から參加者があり、南北アメリカからもある程度の出席者があつたが、アジアでは日本だけで、アフリカと大洋洲とからは一名も來てゐない。日本人は三名となつてゐたが、その中の一人はこの學會の直前に歸國したので、結局二人となつたわけである。他にも名簿にあつて缺席した者、名簿になくてあとから加はつた者があつたから、大體の人数は變らなかつたらしい。われわれ、ただ二人の黄色い會員はかなりに一同の注目の的となり、閉會後の宴會では Daladier が特に私に握手を求めて來て、ていねいな言葉を述べたり、南 France の新聞にわれわれの寫眞が大きく出たりした。これにつけても、私も淺學なりに communication をしたいとはかねて考へてゐたのだが、渡佛が果して出来るか、出来てもこの學會に間に合ふかどうか見通しのつきにくかつた事情もあつて、發表の申し込みが前もつて出来なかつたのは、最も残念なことであつた。

二 學 會 次 第

九月七日、九時に Palais des Papes (教皇の宮殿) の「樞機卿會議の間」で開會式。相當な講堂といつてよい大廣間。正面の壇上には、委員長の Mario Roques を中に Vaucluse 縣の知事 Boissier と Avignon 市長の Daladier とがならび、そのうしろに Fouché, Bourciez,

Boutière, Rostaing の諸氏。

Roques の紹介の言葉について、Daladier の挨拶。更に Roques は長廣舌をふるつて、「諸君の仕事は顕微鏡的にこまかいことを究明するのにある。これは勿論意義のあることではあるが、手段であつて、目的ではない。目的とするところは、南 France の事物についての研究を、他の地方のそれと結びつけて、France 全体の中で、また諸外國との關係において、南 France の事物にその本來あるべき地位を與へることにある。」と結んだ。

それからの研究発表は、二組に分れて、一組はその場で、他の組は Palais du Roure で始まつた。ただし、二日目からは、全部が Palais du Roure の二つの室で行はれる。

研究発表の模様は後述する。

正午に、市役所の大廣間で、市長招待の vin d'honneur。一杯の葡萄酒で乾杯、挨拶としばしの歓談である。

午後には、Mistral, Roumanille とならんで Félibrige の初期の三羽鳥の一人である Aubanel の胸像の前に集まつて、花を手向ける。父祖の業をついで印刷出版をやつてゐる Aubanel 家の當主（詩人の孫）やその一門が出席。そのあと、観光バスを列ねて、Palais des Papes（教皇の宮殿）と、對岸の小邑 Villeneuve-lès-Avignon とへわかれて見學に出かける。

France 各地で、夏期には名勝舊蹟を舞臺として行はれてゐる Son et lumière といふ催しが、ここでも Palais des Papes で行はれるのを、一同夕食後に見物。その後、うしろの庭園で Provence の踊りと音楽とを見聞する。

九月八日 Provence が誇る大詩人 Mistral の生誕百二十五年の記念日。

九時、一同バスで南行して、Mistral が生まれて生涯をすごした Maillane に到る。村の教會で、Provence 語によるミサ。それから、この地方の名物である長太鼓と短笛との樂隊、傳統の装ひをした女たちを先に立てた長い行列を作つて、Mistral の墓地へ。そこで、Mistral の甥の子にあたる、同じ名の Frédéric Mistral が Provence 語で挨拶。彼は、現在の Félibrige の capoulié（頭領）である。

ついで、Mistral 記念館を見る。詩人が千九百十四年にその長い生涯を終へた、最後の住居である。生前からの所藏品に死後に加はつた寄贈書その他を多く持つてゐて、詩人の簡素な寢室なども見られる。生前から残つてゐる庭前の大榎に、この地方と Félibrige とにゆかり深い蟬の聲のしないのだけが遺憾であつた。（蟬の聲は後にほかで聞いたが、日本のの方が味がある。）

更に南下して Saint-Rémy に到り、町役場で vin d'honneur。町長 Charles Mauron は盲人で docteur ès lettres。Provence の言葉とその傳統とをたたへる熱辯を、Provence 語に乗せて、われわれ一同を感動させた。彼は provençaliste として、鐵中の錚々である。

小學校で一同晝食。

東南へ走つて、Les Baux に到る。この地方の小山脈 Alpilles から一つ離れて立つ山で、中世に栄えた城郭の跡が残つてゐる。鑛物の bauxite は、この名に因んでつけられたものである。

Glanum の古ギリシア・ローマの遺跡の發掘の状況を見て Saint-Rémy へ歸り、野外の舞臺での踊りと歌。傍らの小さい Musée での Provence 文獻の陳列即賣。Paris あたりでは買へないものが多いので、もとより重からぬ財布を更に軽くする。

夜九時から、同じ舞臺で Nice の劇團による la Pignata d'or (金の壺) といふ芝居。座頭の Francis Gag といふのは、Monte-Carlo 放送の人気者でもあるらしい。南佛語中の Nice 方言を用ひる劇團であるが、この宵はある程度この Rhône 谷地方の言葉になほして上演したらしい。とにかく、すこぶる興味あるもので、夜半をはるかに過ぎるまで楽しく見て、Avignon の宿へ歸つたら、二時であつた。少々疲れた。

九月九日 昨日あれだけ遅くなつたのに今朝は programme 通り九時に研究發表を始めた。尤も、一同の中には、自家用車や定期バスで早目に昨夜引きあげた人もあつたやうだが。

今日は一日中研究發表。むろん、十二時から二時までは休憩で、二時から六時まで再開。

夕方、Aubanel 家で vin d'honneur。同家の收藏品の展観。

夕食後、Palais des Papes の樞機卿會議の間で「Provence の夕」。歌や朗讀、物語や luth の演奏と、盛澤山。夜半まで續いたやうだが、適當に引きあげる。

九月十日 終日學會。五時をすぎてから、Palais des Papes のいつもの廣間で閉會式。各司會者 (Roques, Bourciez, Fouché の三人。Boutière は健康のすぐれぬために司會をしなかつた。) から、自らの司つた communications についての批評があり、例によつて Roques が最も長く話した。

一度宿へ歸つてから、また Palais des Papes へ行き、Salle des Grandes Audiences (大謁見の間) での banquet に臨む。電燈を用ひず、町中からかり集めた燭臺に大蠟燭をとぼし、中世流の装ひをした給仕人、中世の音楽を配して、甚だ芝居がかつたもの。その昔の教皇の宴か、大領主のうたげに列する思ひ。menu まですつかり Provence 語で書いてあつて、翌日の地方新聞にそれが載つてゐた。

九月十一日 Arles — Camargue 行。觀光バスで、Tarascon を經て Arles に至り、遺蹟見學の後、Museon Arlaten に到る。Mistral が、その得た Nobel 文藝賞金をつぎこんで、Provence 土俗博物館としたもの。ここで vin d'honneur。館内を見物。おびただしい收藏品は、再遊し

なくてはゆつくりとは見物出来ない。中庭では Provence 踊りのもてなし。

午後は Arles から約一時間を ひた走りに Rhône 河口の三角洲 Camargue の西の突端に到る。映畫 *Crin blanc* (白い馬) でおなじみの土地。この附近で、荒野に走らせた仔牛を捕へて、これに焼印を押す ferrade の次第をみる。ついで、海岸にただ一つ離れて存在する町 Saintes-Maries-de-la-Mer. Provence 人が聖地とし、またジブシーが集まるのでも有名な寺がある。この arène で、Provence 流の闘牛 (イスパニア流の血なまぐさいのとは異なる。) 興行を見て、夜に入つて Avignon へ歸る。これで學會の行事は全く終つたのである。

三 研究發表と討論

この學會には、France からはもとより、ヨーロッパ、アメリカから、南部 France の言語文藝の大家たちがかなり多く來り會した。France では、運営司會にあたつた既記の人々は別として、Paris 大學の Frappier, Lévi-Provençal, Collège de France の Lecoy 等、ドイツでは、Zeitschrift für romanische Philologie の主宰者である München 大學の Rohlf, イタリアからは Roma 大學の Monteverdi, イギリスからは Edinburgh 大學の John Orr, スイスからは Basel 大學の Von Wartburg, アメリカからも Ohio 州立大學の Schutz の諸氏であり、後に述べるやうにドイツの Schurr の發表も意義のあるものであつた。地元の南 France の一流人士の参加はむろん特に多く、かういつた顔ぶれから見ても一流の国際學會であつたといへる。ソ連にはどれだけこの方面の研究が行はれてゐるのか、一人の出席者もなかつたので判明しないが、所謂共產圏からも、自ら發表をしたポーランド出身の M^{me} Boutière のほかに、ポーランドから四人、ユーゴスラヴィアから一人の學者が出席した。France 語學の Dauzat は健康の許さぬため缺席し、また、名簿には Gustave Cohen の名も見えるが、恐らく來なかつたのであらうと思ふ。

會の進め方は、研究發表者のすぐ横に司會者が座を占め、これに一人乃至二人の補助司會者がついて行はれた。補助者は、まれに司會者が席をはづす場合はその代行をし、發表のあとの討論にも加はる。私も Roques から、ある午前中その席に着くやうにいはれたが、その朝は二つの會場に傾聴すべき發表があつたので、出たりはいつたりしなければならないので、辭を厚くしてこれを辭した。勿論その任でもない。

司會は、他の二人、すなはち Fouché と Bourciez とは、比較のおだやかに進行させてゐたが、Roques だけは傍若無人で、時には發表中にさへ口を入れることもあり、むろん發表後の討論では自分が先に立つて批評したり、質問したり、時には非難したりした。あれだけの長老であるか

らそれもゆるされたのではあらうが、時には少々出過ぎてゐると思はれた。しかし、一方では、討論に活気が加はつたことも事實である。そのために豫定の時間が延び、しかも終りの時刻は厳守するので、次の日に廻らねばならぬ発表者も出来、最終日まで待つても、地元南 France の一二人は、つひに発表が行へないで終りとなつた。遠來の人の発表はさすがに削るわけにも行かないので、地元の學者が遠慮したらしい。

討論の用語はむろん France 語であつたが、そのまとめ役をした各司會者はじめ France 人はもとより、外國の人々も、たとひ發音は下手でも、いふことに文法的な誤りは少々あつても、ともかくよく発表者の言について行き、これに對して疑問を出し、議論をするのには感心した。發音のことでは、France 人の中にもその出身地のなまりを出して、標準 France 語とはかなり縁の遠い人もある一面、外國人で實にうまい France 語を使ふ人も少くなかつた。

発表に用ひた言語は、絶對多數が France 語、カタルーニャ語 (Catalan) のものが一つ、Provence 語のものが二つでそのうち一つは occitan 派のもの、今一つは niçart (niçois) のものであつたやうだ。しかし、Provence 語のものは、二つとも取消になつて、聞くことを得なかつた。カタルーニャ語のは、Cambridge 大學の講師であるカタルーニャ出身の人が発表したものである。

前にも述べたやうに、発表は一時に二個所で行はれたので、一方に出席してをれば、他は聞きのがすこととなる。そこで、一應、programme に出てゐる、その日その日の各室の部會名をつぎにしるすこととする。ただし、前記のやうに、時間の都合や発表者の事情で、他の日に廻ることになつたものもあるので、實際は必ずしもこの通りではない。區分の後の數字は、その中での発表の數である。

Littérature ancienne	五
Toponymie	五
Les Troubadours	七
La langue de Mistral — Phonétique moderne	八
L'ancienne langue d'oc — L'ancienne poésie d'oc — Musique médiévale	八
Littérature moderne, du XVI ^e au XIX ^e siècle	七
Mistral	七
Dialectologie moderne	七
Littérature moderne — Les atlas linguistiques	五
Les études de langue d'oc à l'étranger	五

次に, Félibrige についていへば, Mistral は さすがに圧倒的に多くて, これを題目または主な内容としたものは十, Roumanille は一, その他の人々についてのものが若干あつたが, Aubanel は全くなく, また Félibrige の初期七人のうち他の四人についてのものも皆無であつた。

以下に, 発表のうちで, 私が簡単なメモをとつておいたもの, 自らは聞くことを得なかつたが他のそれを聞いた人から後に傳へてもらつたもののうち, 目ぼしいものをここに紹介する. 不完全, 不十分な聞き書きにすぎないし, また, これ以外にすぐれた発表がなかつたわけでは決してない。

Rohlfs: Un type inexploré dans la toponymie du Midi de la France

南 France は勿論, France 各地から東は小アジアに至るまでに多く存する *ès* で終る地名——Cavaillès, Vaccarès など——がこれまで究明せられていないことを説き, これが, ラテン語の語尾 *āsus* または *ēsus* にさかのぼること, さうして, Aquitania では *ōssu*, Gaule では *ēssu* となつて, *ès* に至つたと説明. Alès もこの類に入るといつたが, あとで質問が出て, これは別の語源に依るものであらうといはれ, Rohlfs は簡単にそれを認めた. なほ, Alès は後に Alais, 二十世紀に入つてまた Alès と古名に復したもののだが, これはラテンの Alestum から出るもののやうである. その他の點では司會者の Fouché も Rohlfs の説をよしとした。

Salvat: Contribution historique à la langue de Mistral

Salvat 師は, Provence 語の中でも, Toulouse を中心とする occitan 派の領袖である. Mistral はごく若い時代にイスパニア語を學んだ. 彼の師であり, 後の協力者である Roumanille は, この語の勉強がいかに弟子の Provence 語をよくするのに役に立つたかに驚いたといふこと。

Stefanini: La position du provençal par rapport aux autres langues romanes
d'après la grammaire provençale inédite de l'abbé Féraud

古 Provence 語は近代イタリア語, イスパニア語の母ともいへること, あたかも Provence に住んでその感化を受けた Petrarca が近代イタリア文學の父であるやうなものといふ説. この発表は, 本人が支障で出席出来なかつたので, Aix-Marseille 大學の名譽教授である Brun が代讀した. 弟子のものをその師が代行したのに興味がある. Stefanini は Aix-Marseille 大學の助手。

Lévi-Provençal: Les khardjas romanes dans les muwashshas hispano-arabes

この発表は聞くことが出来なかつたので詳細は不明であるが, 古 Provence 文獻の輸出といつたものであつたらうか. とにかく Lévi-Provençal は本年死去した, イスラム文化研究の France における第一人者で, 兼ねて philologie romane の造詣の深い人. アラビア文化がイスパニアを通つて南 France へ入り, その地の叙事詩の一要素となつたといふ説は, かつての否定にもか

かはらず今日支配的になりつつあるので、この點の究明にはかういふ傾向の人に期待することが多いわけである。

Boutière: La genèse du *Trésor*, de F. Mistral

千八百七十九年から刊行せられ、Nobel 賞をも受ける一因をなした Mistral の浩瀚な Provençe 語・France 語辞典 *Lou Tresor dóu Felibrige* (*Le Trésor du Félibrige*) について、Mistral は千八百五十三年以來、あるひはそれ以前から辭書の編纂のことを考へ、最初は、それまでにあつた Honnorat の辭典のあとに白紙をつけて、新語を加へ、Honorat では不明の意味を解明して、しるした。千八百五十四年の Félibrige 結成以來の文藝運動の結果、その程度では不満足となり、原稿は次第に大をなした。*Trésor* の草稿は三種。最初のは三冊で簡單、第二回のは J までしかないが大分詳しくなり、第三回のが決定的で、公刊まで持ちこんだもの。説くところ、講壇的であるが、明快であつた。

Colotte: Mistral, classique ou romantique?

Mistral には、この題にある通りの兩要素がまじつてゐるが、結局 un grand romantique (de mage) である。説明の引きたたなかつたのが惜しい。発表者は Aix-Marseille 大學講師。

Mauron: Le vocabulaire affectif de *Mirèio*

主として、Mistral の第一の長篇敘事詩 *Mirèio* (*Mireille*) について、彼の affection をあらはす語には imprécision, ambiguité のないことをまづ説く。*Mirèio* は、amour, douleur, peur の三つをあらはす語で成つてゐるといつてよい。大體 Mistral の用語を他の romantiques français と比べると、Mistral においては八十五パーセントが人に關するものであり、Hugo, Lamartine 等においては五十、五十くらいの割合である。

Mauron は、かの Saint-Rémy の盲人町長で、この日も介添役に手を引かれて出席した。彼は Mallarmé の研究でも知られた人物である。

Michaelsson: Mistral et le prix Nobel

Mistral が Nobel 賞の選にかかる前に、その *Mirèio* の部分譯がスウェーデンで出版せられたが、この翻譯ははなはだ拙いものであつた。彼が France 人として二人目の Nobel 文藝賞を受けるにあつて、イスパニアの Echegaray とそれを折半しなければならなかつたのは、これが災ひしたといへる。発表者はスウェーデンの Göteborg 大學教授。

Schurr: Le problème de la diphtongaison dans les parlers provençaux modernes

閉會式の時の Fouché の評では、これ一つでもこの學會の收穫といへるといふほど意義深いものであつたといふ。langue d'oc についてだけでなく、全 langues romanes に關して二重母音化の現象を説いたもののやうである。同じ時に他方の室に出席してゐたので聞きもしたが、

Schurr はドイツの Konstanz に隠棲する人。

Nauton: Atlas linguistique et ethnographique du Massif Central

Lyon の C. N. R. S. (Centre National de Recherches Scientifiques) の調査囑託。

France の中央高地帯の言語土俗分布について、たとへば Les étoiles luisent. といふ標準語のいひ方をそれぞれの小さい地方でどういつてゐるか、また、「月の中に何が見えるか」といふに對して、St Girard portant un fagot de buissons とか、le diable qui met un fagot au feu だとかいふやうな、それぞれの土地での傳統的ないひ方を調べたもの。

Séguy: Les prochains atlas méridionaux

昔の Gilliéron-Dauzat の「France 言語地圖」に代る新しい Atlas linguistique は、戦前から作製が始まつてゐるが、Séguy が教授を勤めてゐる Toulouse 大學はその中の西南方面を擔當してゐる。これを編むにあつての、questionnaire の作り方、語の選擇などについての方法論。ところで、發表後に Roques が言語地圖のこの部分の進捗のおそいことを難じ、Séguy がそれに對して辯明すると、また叱責せられるといふ光景があつた。

Von Wartburg

これは研究發表ではなく、討論のときに出した意見である。一つの單語でもよいが、ある言語現象を採りあげてそれによつて區域を分けると、なるほど文化史上のある現象の普及の限界が示されたやうに見える。しかし、他の一言語現象を採つて同じことを行ふと、それによつて設けられる区分は、前のものと全く異つたものになることがよくある。前のものを採つて、後のものを捨てるわけには行かない。かうして他の同類の言語現象についての比較を重ねて行くと、ますます圖表式分類の困難が判然として来る。これは、かつて自分が France 全體の言語現象について、ある實驗をしたとき痛感したことであつて、先入觀念なしにやればこのやうにむづかしいものかと驚いて、それを放棄せざるを得なかつた。従つて schématiser するには、十分の慎重と嚴密との態度をもつてあたねばなるまい。このやうな警告を、實に立派な France 語に載せて話して、満場の拍手を浴び、共感を呼んだのである。

Orr: La “scripta” provençale et ses origines

Monteverdi: Sur l'authenticité des pièces attribuées à Guillaume d'Aquitaine

この二人の大家は、ここにその題を見るとほり、中世文藝・語學について發表したのだが、ちやうど今一方の室で近代のその發表が行はれてゐて、その方へ私もは行つてゐたので、聞く機會を得なかつた。

あ　と　が　き

以上に述べて来たやうに、この學會は研究發表とそれについての討論と司會者の批評、それから遠足と見學とを主な内容として行はれた。更に、家族同伴の會員も少くなかつたので、會員相互以外に、家族を引つくるための交歓も行はれたものではあらうけれども、それはわれわれのあまり知らないところである。時期を九月の前半に選んだのも、France はじめ歐米各國の暑中休暇中であつてしかも Provence の暑熱も峠を越した季節であり、旅行遊覽の好期であることを考へたのに違ひない。

政治的な雰圍氣は全く見られなかつたし、何かの問題についての決議や聲明を行ふといつたこともなかつた。ただこの折を利用して、Avignon に在住するカタルーニャの出身者 Luis Esteva といふ人が、カタルーニャ語をもつてする文藝、社會運動に對するイスパニア政府の壓迫干渉を訴へる文書を配布したのが、少し注目を惹いた程度であつた。

南 France 各地の新聞は毎日相當大きな紙面をこの學會の記事にあてたし、それらにはかなり注意して目を通した。しかし、私の迂闊や怠惰もあり、また France へ着いて早々にこの學會に出、晝夜精勤したし、その後もつづいて旅行に日を送つたので、しばらく Paris と疎遠になつてゐたために、首都發行の日刊新聞の學藝欄、Les Nouvelles Littéraires とか Le Figaro Littéraire とかいふ週刊學藝新聞に洩れなく目を通すことをしなかつたので、それらに何とあつたかは知らない。それに、この方の専門乃至専門に近い雑誌である Romania や Le Français Moderne などの、その直後に發行せられた號を見ても、ほとんどそれらしい記事が見當らない。これらの雑誌は、すべてかうした學會については、豫告はするが、事後の報告はあまりしないのを常とする。France 以外の國においても、この學會の報告書が出てから、はじめて問題とするのがまづ普通であらうし、その報告書はまだ出版せられないので、文書にあらはれた反響は廣く大きくはないと考へられる。

それにしても、南 France の言語・文藝についての世界各國の研究者を一堂に集めた會合は、これがはじめてであつただけに、そのみでもこの學會の意義はあつたといへる。實は、地元の南 France の一般の人たちは、France 各地からはもとより、世界各國から多くの研究者の集まつたのに、多分の誇りと同時に相當な驚きを感じたらしい。Carmen や Colomba の作者である Prosper Mérimée がはじめて Rhône 河を下つて來たときには、イスパニアへでも着いたかと思つたといふ (Mérimée: Notes d'un voyage dans le Midi de la France) Avignon も、百二十年後の今日では、もちろん Paris を中心とする France 語、France 文藝の土地であるが、その土地の人は、自分たちの祖先傳來の言語とその所産とがこれだけの研究價值をもつも

のであることを、いま悟らせてもらつたわけである。將來における Provence 語、文藝運動の發展と、それに對する民衆一般の理解とに、これが大いに貢獻するところはないであらうか。

廣い意味でのロマンス語、文藝の研究は、本年（昭和三十一年）四月にイタリアの Firenze において、その第八回國際學會を開くにいたつたほどに盛である。このロマンス語學界においての南 France 語、文藝の分野といふものも、Avignon 學會を機會としていよいよ認識があらたになるであらうと思はれる。

前にも述べたとほり、今度の學會では南 France 近代語の graphie の問題、その教育の問題は採りあげられなかつた。これは會を圓滿に進行させ、他の多くの問題の開陳に支障を來させないためには賢明であつた。しかし、同時に、この處置がもの足りなさを感じさせたことも事實である。（今一つの、provençal 等の語を用ひないやうにいふ方は守りきれず、communications の題名にもそれがあらはれてゐたが、別に議論の種とはならなかつたらしい。）それと今一つ、現代の南佛文藝についての發表のないことも遺憾であつた。なほ、これは大したことでもないが、最終日の Arles-Camargue 行には、引率者の指導と世話とが今一つ行届かなかつたのは、それまでに主催者側が疲勞してしまつてゐたためとはいへ、今後の會に注意を要することである。

この學會の第二回は、昭和三十三年秋に開かれる 豫定である。場所は未定であるが、Aix-en-Provence になるかも知れないと、關係者から聞いてゐる。